

主 題： ゆえもなく憎まれるとき
聖書箇所：詩篇35篇

テーマ： いわれのない非難によって苦しむとき、信仰者はどのように祈ることができるのか

今朝、皆さんとともに学んでいきたいみことばは詩篇35篇です。まずみことばをお読みしますので、神様からのことばにそれぞれよく目を留めてください。

詩篇35篇 ダビデによる

「:1 【主】よ。私と争う者と争い、私と戦う者と戦ってください。:2 盾と大盾とを手に取って、私を助けに、立ち上がってください。:3 槍を抜き、私に追い迫る者を封じてください。私のたましいに言ってください。「わたしがあなたの救いだ。」と。:4 私のいのちを求める者どもが恥を見、卑しめられますように。私のわざわいを図る者が退き、はずかしめを受けますように。:5 彼らを風の前ののみがらのようにし、【主】の使いに押しのけさせてください。:6 彼らの道をやみとし、また、すべるようにし、【主】の使いに彼らを追わせてください。:7 まことに、彼らはゆえもなく、私にひそかに網を張り、ゆえもなく、私のたましいを陥れようと、穴を掘りました。:8 思わぬときに、滅びが彼を襲いますように。ひそかに張ったおのれの網が彼を捕え、滅びの中に彼が落ち込みますように。:9 こうして私のたましいは、【主】にあって喜び、御救いの中にあって楽しむことでしょう。:10 私のすべての骨は言いましょう。「【主】よ。だれか、あなたのような方があるでしょうか。悩む者を、彼よりも強い者から救い出す方。そうです。悩む者、貧しい者を、奪い取る者から。」:11 暴虐な証人どもが立ち、私の知らないことを私に問う。:12 彼らは善にかえて悪を報い、私のたましいは見捨てられる。:13 しかし、私は一、彼らの病のとき、私の着物は荒布だった。私は断食してたましいを悩ませ、私の祈りは私の胸を行き来していた。:14 私の友、私の兄弟にするように、私は歩き回り、母の喪に服するように、私はうなだれて泣き悲しんだ。:15 だが、彼らは私がつまずくと喜び、相つどい、私の知らない攻撃者どもが、共に私を目ざして集まり、休みなく私を中傷した。:16 私の回りの、あざけり、ののしる者どもは私に向かって齒ぎしりした。:17 わが主よ。いつまでながめておられるのですか。どうか私のたましいを彼らの略奪から、私のただ一つのを若い獅子から、奪い返してください。:18 私は大きな会衆の中で、あなたに感謝し、強い人々の間で、あなたを賛美します。:19 偽り者の、私の敵を、私のことで喜ばせないでください。ゆえもなく私を憎む人々が目くばせしないようにしてください。:20 彼らは平和を語らず、地の平穩な人々に、欺きごとをたくらむからです。:21 彼らは私に向かって、大きく口を開き、「あはは、あはは。この目で見ただぞ。」と言います。:22 【主】よ。あなたはそれをご覧になったのです。黙っていないでください。わが主よ。私から遠く離れないでください。:23 奮い立ってください。目をさましてください。私のさばきのために。わが神、わが主よ。私の訴えのために。:24 あなたの義にしたがって、私を弁護してください。わが神、【主】よ。彼らを私のことで喜ばせないでください。:25 彼らに心のうちで言わせないでください。「あはは。われわれの望みどおりだ。」と。また、言わせないでください。「われわれは彼を、のみこんだ。」と。:26 私のわざわいを楽しんでいる者らは、みな恥を見、はずかしめを受けますように。私に向かって高ぶる者は、恥と侮辱をこうむりますように。:27 私の義を喜びとする者は、喜びの声をあげ、楽しむようにしてください。彼らにいつも言わせてください。「ご自分のしもべの繁栄を喜ばれる【主】は、大いなるかな。」と。:28 私の舌はあなたの義とあなたの誉れを日夜、口ずさむことでしょう。」

さて、皆さんはこれまでの歩みにあって、いわれのないことでだれかから非難されたことはないでしょうか？理由もなく、だれかからことばやふるまいによって傷つけられたこと、身に覚えのない嘘や偽

りが周りで広がってしまい、自分にはそれをどうすることもできずに苦しんだことはないでしょうか？自分自身は愛をもって相手に善を行ったにもかかわらず、そのことに感謝もされずに、むしろあなたの態度を批判されるような場面に出くわしたことはないでしょうか？あなたのことを思っただけなのに、どうしてこんな目に遭っているのだろうか？そんな疑問や悲しみを抱いたことはないでしょうか？おそらく、皆さんの多くが、そんな経験をしたことがある、と言われるかと思います。またさらに言うなら、私たちがキリストに忠実に従っていこうとすれば、その信仰のゆえにこの世で難しさを覚えるようになる、とみことばは繰り返し教えてくれていました。マタイ5：11-12でも「:11 わたしのために人々があなたがたをのしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。:12 喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。」

では皆さん、ここでよく考えてみてください。私たちがそのような状況に置かれることは多々ありますが、そのような中で、普段皆さんはどのようにふるまっているのでしょうか？そのような状況をどのように捉えて、それに応答しようとしているのでしょうか？自分の周りで起こる受け入れがたい現状に自分の心が痛み、悲しみに支配されてしまわないでしょうか？自分にはどうすることもできない状況に対して不安を覚えたり、人に対して恐れを抱いて失意に陥ることがあったり、もしくは自分に辛い苦しみをもたらした人物に対して何かしらの形で仕返しすることを企ててみたり、そんな状況をもたらした神様に対して怒りや不満を覚えたりしないのでしょうか？もちろん、ありもしないことで不当な扱いを受けて苦しみの中に置かれれば、みな大きな難しさ、大きな悲しみを覚えます。しかし、その中にあるときこそ神様を見上げて、そこに希望を見出して歩もうとしているのでしょうか？

きょう私たちが見るこの詩篇35篇の著者であるダビデは、まさにいわれもない非難や攻撃によって苦しんでいました。彼は身に覚えのないことで敵に憎まれて、理不尽な扱いを受けていたのです。残念ながら、この詩篇がどのような歴史的背景のもとで記されたのかについて詳しいことはわかっていません。ある人は、ダビデがサウル王様にいのちを狙われていた時にこれを記したのではないかと考えていますし、また、息子アブサロムに追われて反乱に遭っていた時にこれを記したのではないかと考えている人もいます。確かなことは私たちにはわかりませんが、間違いなくわかることもあります。それは、ダビデが彼を取り囲んでいる人々によって、不当に扱われて苦しめられていたということです。今、私たちは35篇を一度、全体を通して読みましたが、ダビデは其中で少なくとも三度にわたって、「ゆえもなく」ということばを口にしていました。7節に二度そのことばが出てきます。7節「まことに、彼らはゆえもなく、私にひそかに網を張り、ゆえもなく、私のたましいを陥れようと、穴を掘りました。」また19節の特に後半部分にも同じことばが出てきました。「ゆえもなく私を憎む人々が目くばせしないようにしてください。」とダビデは繰り返し訴えていました。「私はゆえもなく苦しめられています。私は彼らに責められるようなことは何もしていないのに、ひどい苦痛を味わっています。どうしてこんな目に遭っているのかはわからないけれど、あまりにも敵が理不尽に私のことを扱うのです。だからどうか神様、この状況から助け出してください。この状況の中であって私を守ってください。」と。

このように、ゆえもなく憎まれたダビデは、その中で神様に助けを祈り求めていました。その様子をこの詩篇は私たちに教えてくれているのです。ゆえもなく憎まれた人物がその状況の中でどのようにして祈っていたのか？ですから、そのダビデの姿からきょうは一緒に学んでみましょう。いわれのないことで非難を受けて苦しみを味わっていたダビデが、その状況でどのように忠実に歩もうとしていたのかを考えてみましょう。一体、何をもちて彼はその中で希望見出すことができたのでしょうか？

○ゆえもなく憎まれるとき：ダビデのささげた三つの祈り

これから見るこの詩篇の中には大きく三つの祈りを見ることができます。ダビデは三つの祈りをここにささげます。まず、1-10節のところで 一つ目の祈りが出てきます。二つ目の祈りが11-18

節のところに。そして最後三つ目の祈りが19-28節のところに登場しています。これからその祈りを一つ一つ考えていきますが、ぜひ皆さん、ご自身もゆえもなく憎まれるようなときに、いつも希望を主に見出すことができるように、主に喜ばれる歩みをする者として成長し続けられるように、そのことの助けと励ましにこのみことばが、この時間になることを心から祈っています。

1. 神様のうちに助けを見出した祈り 1-10節

では早速、一つ目の祈りから見ていきましょう。1-10節にそれが記されていました。一つ目の祈りは、「神様のうちに助けを見出した祈り」です。苦しみに直面していたダビデは、ほかのだれでもない義なる神様のうちにただ救いを求めていました。詩篇を始めるにあたって彼はこのように訴えます。まず1-3節に「:1 【主】よ。私と争う者と争い、私と戦う者と戦ってください。:2 盾と大槍とを手にとって、私を助けに、立ち上がってください。:3 槍を抜き、私に追い迫る者を封じてください。私のたましいに言ってください。「わたしがあなたの救いだ。」と。」ダビデはここで、神様が自分と争う者、戦う者から自分の身を守ってくださるよう願っていました。これを読んで、「争う」、「戦う」、「盾や槍」といったことばから、ダビデが戦場での敵との戦いに言及しているのではないかと考えた方があるかもしれません。けれど、戦場でのことについて話を限定していたわけではありません。これらの軍事的な用語は比喩的な表現として用いられていて、実際、1節に出てきた「私と争う者と争い」の「争い」ということばは法律用語として用いられるものでした。「争う」というのは、法廷で相手に対して訴訟を起こす、そのような場面で用いられることばだったのです。ですから、ダビデはここで戦場の話をしているわけではなく、法廷の話もイメージとして用いていました。この「争う」ということばは、例えば、出エジプト記の中でこのように登場しています。出エジプト記23:6を見ると「あなたの貧しい兄弟が訴えられた場合、裁判を曲げてはならない」と出てきます。この「裁判」ということばに、今見た「争う」ということばと同じことばが用いられているのです。ですから、ダビデがここで言わんとしていたことは、戦場だけではなく法廷においても、もっと言えば、自分に対して悪意を持って攻撃してくるどんな敵からも神様が守ってくださるようにと、強く祈っていたということでした。「どんな敵からも、神様、私を守ってください。私と争う者と争ってください。私と戦う者と戦ってください。私を安全に守ってください。」それが、ダビデが最初に願ったことでした。色んな困難を覚えて、ありもしないことで非難されていたダビデは、そのことを最初に願ったのです。

彼は自分の立場がどのようなものかをよくわかっていました。彼は、敵からの攻撃に耐えることができるそんな力は自分にはない、とわかっていたのです。自分のうちには問題を解決する力もなければ、その状況から抜け出すための何かしらの策はない、とわかっていました。でも同時に、彼は自分のうちにはそんな策はないけれど、どこからその助けが来るのかをわかっていました。どこを見上げれば、自分に必要な完全な守りがあるのかをよくわかっていました。ですから彼はまず、「【主】よ。」と神様に目を向けたのです。神様の守りを求めていたのです。「全知全能の神様がまるで戦士のように盾と槍を持って自分のために立ち上がってくだされば、それで十分です。ほかには何もいません。私は、神様がおられればそれで十分です。神様の守りがあればそれで十分なのです。」とそう覚えていたのです。また彼は3節の終わりでこのようにも願ってもしましたね。「私のたましいに言ってください。「わたしがあなたの救いだ」と。」ダビデは、神様こそが十分な守りなのだ、神様こそが自分に必要な助けなのだ、そのことを与えられるお方なのだ、とわかっていたはずなのに、でも、ダビデはその真理を何度も何度も自分の心に思い出させてもらう必要があったのです。何度も何度も主に祈っていました。「私の心に語ってください。あなたが私にとって必要な救いなのだ、とそう私に語ってください。」

これは私たちにとっても非常に大切なことです。ときに私たちが、理不尽な自分にはどうすることもできない状況に置かれるなら、私たちの目は色々なところを見るかもしれません。状況に心がとらわれ、状況が良くなることに希望をおいていれば、それがいつまでも変わらず自分の思いどおりにならな

ければ、そこに失望を抱きます。また、自分のうちに助けを見出そうとするなら、当然そこには、無力さというものを覚えるでしょう。恐れや不安というものも生じるでしょう。だからこそ皆さん、私たちはいつもへりくだって、祈りをもって自分自身に思い出させ続ける必要があるのです。「神様、あなただけが私にとっての救いです。私のうちには救いはなく、ただあなただけが私に必要な助けを与えることができる偉大なお方です。だからどうか、その真理に私がいつも心を留めていられるように助けてください。」ダビデはいつもその真理を覚えられるように、神様が自分に対してそのことを語ってくださるようにと願っていました。ダビデはそのように神様のうちにのみ助けを見出していたのです。救いを与えることのできる唯一の方に目を向けて、自分にはできないことをこの方が代わりに成してくださるようにと求めていました。

● “主の使い” に関して

そんな彼が続けてこのように祈ります。4-6節「:4 私のいのちを求める者どもが恥を見、卑しめられますように。私のわざわいを図る者が退き、はずかしめを受けますように。:5 彼らを風の前のもみがらのようにし、【主】の使いに押しのけさせてください。:6 彼らの道をやみとし、また、すべるようにし、【主】の使いに彼らを追わせてください。」覚えておられますか？ここでダビデは、先週見た詩篇34篇にも出ていた「【主】の使い」ということばを再び用いていました。詩篇34:7の最初に出てきた「【主】の使い」が何を意味しているのかについては前回も少しだけ触れましたが、ある註解者たちは、この存在が神様ご自身を表していると考えています。それも間違っていないのかもしれませんが、ただし、私自身はこの存在が受肉前のイエス・キリストの姿を指している、と考えています。どうしてそのように言えるのか？この時間にすべての箇所を見ることはできませんが、いくつかの箇所からそれを考えてみたいと思います。そして皆さんご自身で、この方はだれを指しているのか考えてみてください。

まず一つ。この「【主】の使い」はサライのところから逃げていたハガルのもとに現れていました。そのことが創世記16:7-8、13に記されています。7と8節を見ていただくと、「:7 【主】の使いは、荒野の泉のほとり、シュルへの道にある泉のほとりで、彼女を見つけ、:8 「サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行くのか」と尋ねた。彼女は答えた。「私は女主人サライのところから逃げています。」」7節の最初に「【主】の使い」ということばが出てきていますね。この後で「【主】の使い」はハガルに対して祝福を約束したのですが、皆さんに注目してほしいのは、約束のことばを聞いたハガルがこのように言うのです。13節に「…そこで、彼女は自分に語りかけられた【主】の名を「あなたは、エル・ロイ」と呼んだ。」彼女は自分に語りかけた「【主】の使い」のことを「【主】の名」と言っていました。そして「あなたは、エル・ロイ」と呼んだのです。この「エル・ロイ」とは何か？欄外を見ると、「ご覧になる神」と書かれています。この「【主】の使い」という存在は【主】だということです。この方は神様だ、ということです。まずこれを覚えておいてくださいね。

次に、この「【主】の使い」は、イサクをささげようとしたアブラハムに語られてもいました。そのことが同じ創世記22:15-17で「:15 それから【主】の使いは、再び天からアブラハムを呼んで、:16 仰せられた。「これは【主】の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたの一ひとり子を惜しまなかったから、:17 わたしは確かにあなた大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。…」と、「【主】の使い」は、アブラハムにことばを告げていました。その内容は、【主】からのことばでした。つまりこの「【主】の使い」は、神様ご自身でありながら、神様からのことばを語る存在だったということです。これも少し頭に入れていただいて、もう一つ見ればはっきりすると思います。最後はゼカリヤ1:12-13にこう書いています。「:12 【主】の御使いは答えて言った。「万軍の【主】よ。いつまで、あなたはエルサレムとユダの町々に、あわれみを施されないのですか。あなたがのろって七十年になります。」:13 すると【主】は、私と話していた御使いに、良いことば、慰めのことばで答えられた。」ここで注目してほしいのは、「【主】の使い」が「【主】」と話してい

るといふこの部分です。つまりこの「【主】の使い」といふのは、神様ご自身でありながら、神様とは区別された別の存在だったということです。さて、これらの箇所から皆さんはこの「【主】の使い」が一体だれだと言うのでしょうか？ご自身がまことの神様でありながら、神様とは区別された存在、神様にしか語りることができないことを語られた存在。ほかにもみことばを見ていけば、この「【主】の使い」は、神様にしかできない偉大なことを成すことができ、この方はほめたたえられるべき存在でした。一体この方はだれだと思ひます？このような方はほかのだれでもない、三位一体の神様、受肉前のイエス・キリストを現わしていると考えられるのです。すべての初めからおられたお方、神の御子はもちろん旧約の時代も変わらずに存在しておられました。そしてこの方は多くの場合、父なる神様から遣わされた使いとして働かれていたのです。

ダビデは、この主の使いが自分を苦しめる敵たちを退かせて、自分の前から取り除いてくださるようにと祈っていました。自分に悪事を働いていのちを狙うような者に対して、神様がそれにふさわしい報いを与えてくださるようにと願っていたのです。

でも4-6節を見て思われたでしょうが、ダビデはどうしてこんなにも厳しいことを祈っていたのでしょうか？それは、ダビデは、私は無実である、と確信していたからでした。7節を見ていただくと「まことに、彼らはゆえもなく、私にひそかに網を張り、ゆえもなく、私のたましいを陥れようと、穴を掘りました。」と書かれています。ダビデは言っていたのです。「彼らは自分のことを憎んで、陥れようとするけど、でも、私はそれに仕るようなことはしていません。」「彼らにとがめられるけれども、私は何もしていません。まちがったことは何もしてないのに、どうして彼らは私を滅ぼそうとするのでしょうか。」と。もちろん、これは皆さんもよくご存じのように、ダビデに全く罪がなかったという話をしているわけではありません。彼が一切まちがいのない完全な人物だったということを話しているのではないのです。では、彼は何を言わんとしていたのか？ここで彼が訴えていたことは、「私は、敵たちが攻撃してくるような理由に当たることは何もしていません。色んなことを言われていますが、私は無実です。私はいわれもないことで今苦しみを受けているのです。」と彼は叫んでいたのです。自分は無実だとそう確信を持っていたからこそ、無実の自分を義なる神様があわれんでくださるようにと願っていました。自分にはどうすることもできない敵たちの不当な訴えに対しても、「すべてをご存じの神様が代わりに応えてくださり、神様が私を守ってください。」と求めていたのです。

ですから、8節でもこのように続けていました。「思わぬときに、滅びが彼を襲いますように。ひそかに張ったおのれの網が彼を捕え、滅びの中に彼が落ち込みますように。」と。もしかすると、今のこの部分や、また4-6節のところを読んで、あまりにも厳しいことばを書いているから、「ダビデさん、このような祈りはふさわしくないんじゃないですか？私たちは敵であろうが、愛したり赦したりすることが大切だと教えられてきました。「恥を見」るように」とか、「滅びが彼を襲いますように」とか、「滅びの中に落ち込みますように」などと祈るのはちょっと違うんじゃないですか？」と考えた方があるかもしれません。もしそのように思われたなら、少なくとも一つ大切なことを覚えておいてください。それは、ダビデはここで個人的な復讐を願っていたのではなくて、「悪には正しく報いを与える」と約束されていた神様がそのことばどおりに働かれることをただ祈っていた、ということです。ダビデは別に自分の願いを語っていたのではなくて、「神様が悪に対しては必ず報いる」と言われていたことを知っていたからこそ、「神様、仰っていたとおりにそのように働いてください。あなたは正しくて虐げられている者を守ると約束してくださっていました。だからそのようにしてください。（私たちが詩篇1篇で見た）

「悪者の道は滅びうせる」といふ神様を私は知っているので、そのとおりにしてください。」と。ダビデは、自分に悪事を行う者たちに対して、きつく仕返しをしてやろうと考えていたわけではありません。彼は、神様は虐げられている者を守ってくださるお方だとわかっていたので、そのとおりに働いてくださると願っていたのです。別の箇所でも彼はこのように神様に対する確信を表していました。詩篇9：8

ー9で「:8 主は義によって世界をさばき、公正をもって国民にさばきを行われる。:9 【主】はしいたげられた者のとりで、苦しみのときのとりで。」だと。「神様は義によって世界をさばかれるのだ。そのとおりにさばいてください。このようにして誠実な神様が約束されていたとおりに、悪を働く者たちの上に働いて正しい者を助け出してくださるように。」とそう祈っていました。そのようにして神様に信頼していました。

皆さん、大切なことは、ダビデはやはり、ほかのだれでもない神様のうちに助けを見出そうとしていたということです。自分自身のうちでもなければ、周りの状況でもありませんでした。ダビデは助けを与えてくださる神様に身をゆだねていたからこそ、一つ目の祈りをこのように締めくくるのです。9ー10節を見ると、「:9 こうして私のたましいは、【主】にあって喜び、御救いの中にあって楽しむことでしょう。:10 私のすべての骨は言いましょう。「【主】よ。だれか、あなたのような方がいるでしょうか。悩む者を、彼よりも強い者から救い出す方。そうです。悩む者、貧しい者を、奪い取る者から。」と。この時ダビデはまだ敵に苦しめられていました。いわれもないことで彼の心は痛めつけられていたのです。でも彼はその中であつてもなお、神様が必ず自分を助け出してくださる、とそう確信していました。だからこそ、彼は救いが与えられるその時に、私は心から主に向かって感謝をささげるのだと約束していたのです。確かに彼の手にはどうしようもない問題でも、神様の手に負えないものはないと。そしてこの偉大な神様は必ず助けてくださると。その偉大な力を見たときに、「【主】よ。だれか、あなたのような方がいるでしょうか。」それだけが賛美としてあふれてきます」と。ダビデはそのようにして主を見上げ主に信頼し、そして主に賛美をささげることを心に決めていたのです。こうして神様のうちに助けを見出していました。そしてそんな神様に信頼していたからこそ、感謝をささげようとしていました。

2. 神様のうちにすべてをゆだねる祈り 11ー18節

続けて二つ目の祈りを11ー18節に見ることが出来ます。二つ目は「神様のうちにすべてをゆだねる祈り」です。今まで見てきたように、ダビデはいわれもない敵からの非難によって大いに苦しめられていました。でも、彼の苦しみはそれだけではなかったのです。11節から、彼はさらに詳しく自分が経験していた痛みについて教えてくれています。11節からこのように続きます。「:11 暴虐な証人どもが立ち私の知らないことを私に問う。:12 彼らは善にかえて悪を報い、私のたましいは見捨てられる。」と。ダビデはまず「暴虐な証人どもが私の知らないことを私に問う」と。つまり、思い当たる節もない、身に覚えのまったくないことを暴虐な証人たちはもってきて、ダビデを責め立てていたということです。普段はあまり触れませんが、ここでは大切なのでちょっと見ていただくと、11節の最後に出てきていたこの「問う」というヘブライ語の動詞には未完形という時制が使われています。これが何を意味するのかというと、彼らがこのとき、継続的に絶え間なくダビデに問いかけていた、ということを表しているのです。ダビデのことを責め立てている者たちというのは、一回だけダビデを責め立てて終わりではありませんでした。数回やって終わりではなかったのです。彼らは思い当たる節もないものをもって彼をずっと責め立てていたのです。そんな突拍子もないことで非難を受けたダビデは、しかもそれがいつまでも続くことを思ったときに、ダビデは驚いたと思いませんか？どうしてこんな目に遭っているのだろう…と。でも、それ以上にダビデには驚かされたものがありました。12節に「彼らは善にかえて悪を報い、私のたましいは見捨てられる。」と。ダビデは驚いていました。ありもしないことで彼のことをとがめ続けてくるその証人たちをよく見てみると、彼らこそ、自分が愛を示して善を行った人たちだったのです。ダビデは全く知らない人たちからいわれのないことで憎まれていたのではありません。かつて自分が気にかけて世話をしあげた者たちから不当な扱いを受けていたのです。実際にダビデが彼らのために何をしていたのかも続く13ー14節で述べていました。「:13 しかし、私は一、彼らの病のとき、私の着物は荒布だった。私は断食してたましいを悩ませ、私の祈りは私の胸を行き来していた。:14 私の友、私の兄弟にするように、私は歩き回り、母の喪に服するように、私はうなだれて泣き悲しんだ。」すごくシンプルに

書いていました。病を患っているときに彼らのために祈っていたのです。自分の楽しみや快適な生活を優先させるのではなく、荒布をまとって病気の人に寄り添ってあげて、彼らがいやされることを願って熱心に祈っていました。祈り続けていたのです。また彼はそのような者たちを、まるで自分の家族の一員かもしくは親しい友のように、苦しんでいる彼らのことを嘆き悲しんでいました。まちがいなくこの13-14節を見たときに、ダビデが彼らに対して示そうとしたあわれみというのは、表面的なものではなかったのです。彼は、人々が辛く意気消沈して病に伏しているときにも、変わらずに彼らに対してあわれみを示そうとしました。彼らに対して良いことを行おうとしたのです。でも、そんな彼のふるまいに対して人々がどのように報いていたのかというのが15節に書いてありました。「:15 だが、彼らは私がつまずくと喜び、相つどい、私の知らない攻撃者どもが、共に私を目ざして集まり、休みなく私を中傷した。:16 私の回りの、あざけり、ののしる者どもは私に向かって歯ざしりした。」と。彼らがしたことは、善を悪で返すことでした。彼らは感謝をするのではなく、逆に悪口を浴びせていたのです。ダビデは彼らの必要を覚えたときに、喜んであわれみを示して満たそうとしました。でも、彼らがダビデの必要を目にしたときはそれを助けようとしないうばかりか、むしろ苦しんでいるダビデを見て喜んでいました。弱っているダビデを彼らは休みなく責め立てて取り囲んで嘲笑い、罵ったりもしていました。その情景をダビデが目当たりにしたときに、ダビデがいかに混乱してうろたえていたかは、容易に想像できません？自分がかつて愛を示した相手に裏切られて苦しめられていたのです。病の中で苦しんでいたのに犠牲を払って良いことをしてあげたその者から、中傷され、ののしられていたのです。ダビデはまさに文字どおり理不尽で不当な扱いを受けて、大きな苦しみを味わっていました。だからこそ、彼は神様に対して、「助けを与えてください」と必死に祈るのです。17節にこう書いていました。「わが主よ。いつまでながめておられるのですか。どうか私のたましいを彼らの略奪から、私のただ一つのことを若い獅子から、奪い返してください。」ダビデは、自分の置かれている状況を神様がご覧になっておられるとよくわかっていました。自分がどれほどひどく不当な扱いを受けているのかを神様はご存じだと、わかっていました。でも、全知なる神様が自分の状況に全く介入してくださらないから、彼は必死になって訴えるのです。「我が主よ。」と。「神様。一体いつまで眺めておられるのですか？いつまで沈黙を貫かれるのですか？善を悪で返すような不法な行いがあふれて、ありもしないことで非難を受けるような状況がまかり通っています。どうかこの状況を見過ごさないで、今、私を敵から守ってください。私にとってただ一つ重要なもの、つまり、私のいのちを彼らから助け出してください。」こうしてひどく苦しんでいたダビデが見上げた存在、それはやはり神様でした。見知らぬ敵からとがめられたときもそうでしたし、愛をもって仕えた者からの裏切りにあったときも、彼はほかの何者でもなく神様のうちに救いを見出そうとしていたのです。彼は自分自身に頼ることや、自分の力でやり返そうともしていませんでした。すべてを神様の御手にゆだねていたのです。

ここでちょっと立ち止まって考えてみましょう。皆さん、今私たちはダビデが置かれていた苦しい状況を見ましたが、もし、私たちがこのダビデの立場であれば、どんな態度をとるでしょうか？私たちが愛をもって仕えた相手がそのことに感謝をすることもなく、むしろ、私たちをありもしないようなことで非難してくるのです。私たちが頑張って仕えたことが、本来なら良いものとして返ってくると期待していたものが、逆に悪いものとして返ってくるのです。それに対して、私たちならどのように応答するでしょうか？それさえすべて主にゆだねて歩もうとするでしょうか？それとも、自分の手で何かしらの形で復讐しようとしませんか？私たちがだれかに間違っ て扱われるとき、最も自然な私たちの応答は、相手に自らやり返すことでしょうか。直接的なことばや行動を通してそうすることがあるかもしれないし、いやそんなことはしませんと言っても、口には出さずとも、自分のとる態度で相手にそれをわからせようとするかもしれません。相手に対して心の中で悪い思いや、苦い思いを抱くこともあるかもし

れません。私たちは色々な形で、自分が受けた痛みや苦しみ、悲しみ、傷…そういったものを同じようにして相手に味わわせようとするところがあるのです。そんな誘惑はありませんか？

でも、もちろんこれは、みことばが私たちに教えてくれている信仰者の姿ではありません。私たちがよく知っている箇所の一つかもしれませんが、パウロもローマ書の中でこのように記しています。ローマ12：19「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」」はつきりと言われていましたね。「復讐は神様のすることであって私たちの働きではありません。だれかに報いを与えるという役割は、決して私たちのものではありません。私たちに与えられている責任は、やり返すことではなくて、ただ神の怒りに任せることです。」と。ですから皆さん、もし私たちが、ことばだろうが、行動であろうが、態度であろうが、私たちの心の思いであろうが、どんな形であろうともやり返すことを考えているのであれば、私たちは神様の役割を奪っていることになるのです。この箇所に関してトーマス・シュライナー先生はこんな説明をしてくれていました。「私たち信仰者が不当な扱いを受け、罵倒され、権利を侵害されると、不当な扱いを受けたとして、仕返しをしたいという欲求に駆られます。しかし、私たちは仕返しをしたいというその要求に負けてはいけません。むしろ、敵の運命を神の手に委ね、どんな不正も終わりの日に報いられると理解することです。」自ら復讐するのではなくて、ただ神様の正しいさばきにゆだねるということ、それが私たちにとってふさわしい応答でした。もっと言えば、これしか私たちにとって正しい応答はないのです。

でも、もう少し踏み込んで考えて、皆さん、一体どうしてこれが私たちにとってふさわしい行為なのでしょう？どうして私たちは自分たちがさばくのではなく、神様にゆだねるのでしょうか？少なくとも二つのことを言うことができます。

一つは、神様がすべてのことをご存じだからです。この方が知らないことは一つとしてありません。この方は、人がどんな罪やあやまちを過去に犯したのかも知っておられるし、たとえ人には見えていない部分であろうが、まさに今あなたが考えていることも、すべてご存じなのです。そして、この方はすべてのことをご存じであるからこそ、それぞれの方が何に価するのかということも一番正確にわかっておられるのです。

またもう一つ言うのであれば、神様がすべてのことをご存じであるだけでなく、この全知の神様は決してあやまちを犯すことがなく、すべてを正しくさばかれるからです。この方のさばきは決して欠けているところはありません。すべてのことをご存じのお方の前に、いやこんな理由がありましたとか、こんな言い訳があります、などということは一切通用しないのです。全部のことを見ておられる、そして義と公正を愛されるこのお方がなさるそのさばきは、どんなときも正しく完璧なものになるのです。

皆さん、神様がすべてのことを知っておられて、ひとりひとりにどんな報いがふさわしいのかを正確に知っておられ、この方がなさるさばきがいつも正しく完璧なものであるのだとすれば、私たちはどのようにしてこのみことばを実践しようとするのでしょうか？必ず正しいさばきを下されるというこのお方に、喜んで身をゆだねるのでしょうか？それともこの方の御手を押さえて、「いいえ神様、私がさばきます。ここは私が代わりにそれをします。」と言うのでしょうか？復讐は主のなさることです。でも、この偉大な神様のみわざに私たちはどんなときも信頼してゆだねることができるということです。理不尽なことがあったとしても、私たちは神様にゆだねて、この方が最後には正しく報いてくださると信じることができるということです。

もし、それでも私たちが不当な扱いを受けて仕返しをしたいという誘惑に駆られることがあるなら、そんなときはいつも、私たちの主キリストの姿を思い出すことです。このようにペテロは述べていました。1ペテロ2：23-24「：23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。：24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われま

した。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」考えてみてください。私たちの主はそもそも、のしられたり苦しめられる必要などありませんでした。ましてや罪を一切犯すことのなかった完全なお方が、到底、十字架にかかって死ぬ必要などありませんでした。でも、この方は自ら進んで十字架にかかってくださり、その血を流してくださったのです。本来なら私たちが受けるべき罪の罰を、キリストが代わりに背負ってくださり、そして罪に対して燃え上がる神様の怒りを耐え忍んでくださったのです。本来であればここにいるすべての人が生まれながらにゆえもなく主を憎んでこの方に従おうとしなかったからこそ、全員、神の怒りに価する者でした。けれど、私たちに価するその怒りを、キリストが十字架の上でなだめてくださったのです。そして、私たちがまだ神様に対して逆らって歩む罪人の時に、本来は一切私たちには価しないその神様の愛を、まさにこの方が恵みによって与えてくださったのです。だから皆さん、私たちが覚えるべきことは、私たちは本来価するべきものではなくて、本来価しないものを神様が恵みによって与えてくださったということです。本来価しないものを私たちが与えられたことによって、私たちは今、神様を見上げて礼拝をすることができ、この方を「アバ父」と呼ぶことができ、この方に喜びを見出して歩むことができるのです。覚えないといけないことは、私たちの主こそ、ゆえもなく憎まれ苦しまれたお方だったということです。でもこの方が払ってくださった尊い犠牲によって、この方を信じる信仰によって、私たちは救われました。そうだとすれば、この方の模範にならって生きていこうとする者として、私たちはどのようにして生きていくのか、ということです。価しないものを与えられた者として、どのようにして私たちが生きていくのかということです。

また、もしこの中でまだこの救い主イエス・キリストを個人的に知らない方がおられるなら、今見てきたように、神様は必ず正しく罪をさばかれます。そのことは繰り返し聖書が言っていました。あなたが何を考えているのかもすべてご存じの方が、これまで生きてきた中に起こったすべての罪に対し、すべてを知っておられるお方が正しくさばかれる日がやってくるのです。けれど、イエス・キリストはその罪のために十字架にかかってくださいました。この方を信じ、この方の前に罪を悔い改めて、この方のために、この方を信じて生きていく者に救いを与えてくださる、とそう約束してくださっていました。だからこの方をきょう信じて、この方のために生きる人生を始めてください。

ダビデは自分の手で復讐しようとするのではなく、神様にゆだねていました。彼は、ただ神様が自分を守ってくださり助けを与えてくださることを祈り求めていたのです。そして、そんなダビデがしていたことというのは、一つ目のときと同じでした。二つ目の祈りの最後でも、救いを与えてくださる神様に対して感謝を言い表すのです。18節「私は大きな会衆の中で、あなたに感謝し、強い人々の間で、あなたを賛美します。」ダビデはこのようにして神様にすべてをゆだねていました。そして、助けを与えてくださる神様に向かって、自分だけではなくて会衆とともに賛美をささげようとしていたのです

3. 神様のうちに賛美をささげる祈り 19-28節

そして最後三つ目の祈りが19-28節に記されていました。三つ目の祈りは「神様のうちに賛美をささげる祈り」です。ダビデはまた同じようにして、神様に、敵から自分自身のことを守ってくださるとまず祈りをささげていました。19節から見ていくとこうあります。「:19 偽り者の、私の敵を、私のことで喜ばせないでください。ゆえもなく私を憎む人々が目くばせしないようにしてください。:20 彼らは平和を語らず、地の平穩な人々に、欺きごとをたくらむからです。:21 彼らは私に向かって、大きく口を開き、「あはは、あはは。この目で見たぞ。」と言います。」「ゆえもなく私を憎む人々が目くばせしないように…」と。

「目くばせ」をするという表現は、旧約時代において、だれかに対して嘲笑や危害を加えることを意図した二枚舌のような行為、それを描写するものとして使われていました。もっと簡単に言うと、あることを言いながら裏では悪いことを企てているような、そんな行為のことを表していたのです。箴言6:12-14「:12 よこしまな者や不法な者は、曲がったことを言って歩き回り、:13 目くばせをし、足で合図

し、指でさし、：14 そのねじれた心は、いつも悪を計り、争いをまき散らす。」この人物たちは目くばせをする者でした。確かにそのように生きる者だったのです。彼らは自分たちが平和を語ろうとしないばかりか、平穩に生きたいと願う人々をも欺こうとしていました。彼らは真実ではないことを、まるで自分たちが本当に目撃したかのように大声で口にしていたのです。21節に書いていました。「大きく口を開き、「あはは、あはは。この目で見たぞ。」と言います。」彼らはダビデに向かってこう言うのです。「この目で見ましたよ、ダビデさん。あなたのひどいふるまいを私たちは、しかと見ました。」と。そのようにして彼らは嘘によってダビデの評判を落として、偽りによって彼のすべてを滅ぼそうとしました。ダビデはこのように偽りの訴えに苦しめられていたのです。どうにかしてその訴えが不当なものであると証明したくても、自分ではそれに対抗する手段はありませんでした。ありもしないような偽りの証言がやってくることに對して、彼のうちには無実を証明する策は一つもありませんでした。そんな彼はこれまでと同じように、すべてをご覧になっておられる神様に助けを求めるのです。何が正しくて何が偽りなのかをご存じのお方に、代わりに自分を弁護してくださいと熱心に願っていました。それが22節から続きます。「：22 【主】よ。あなたはそれをご覧になったのです。黙っていないでください。わが主よ。私から遠く離れないでください。：23 奮い立ってください。目をさましてください。私のさばきのために。わが神、わが主よ。私の訴えのために。：24 あなたの義にしたがって、私を弁護してください。わが神、【主】よ。彼らを私のことを喜ばせないでください。：25 彼らに心のうちで言わせないでください。「あはは。われわれの望みどおりだ。」と。また、言わせないでください。「われわれは彼を、のみこんだ。」と。：26 私のわざわざを楽しんでいる者らは、みな恥を見、はずかしめを受けますように。私に向かって高ぶる者は、恥と侮辱をこうむりますように。」ダビデは必死に助けを求め続けていました。彼はわかっていたのです。もし主が自分に答えてくださらなければ、ありもしないことを訴える者たちが勝ち誇るようになってしまうと。善を悪で返すような者たちが、平和を壊して偽りを語るようなそんな敵たちが、すべて我々の望み通りだと勝ち誇るようになってしまうと。でも、ダビデはそのようなことで不安になってパニックに陥っていたわけではありませんでした。彼は同時に、必ず神様は無実な者の祈りを聞き入れて、敵からの助けを与えてくださると強く確信していたのです。そのようにして神様が確かに救いを与えてくださると。その時に、ダビデは個人としても、またほかに誠実に歩む者たちとも一緒になって神様に賛美をささげるのだと、最後に繰り返し言うていました。最後27-28節にこう書いています。「：27 私の義を喜びとする者は、喜びの声をあげ、楽しむようにしてください。彼らにいつも言わせてください。「ご自分のしもべの繁栄を喜ばれる主は、大いなるかな。」と。：28 私の舌はあなたの義とあなたの誉れを日夜、口ずさむことでしょう。」ダビデは救いを与えてくださる神様に信頼して、この方にいつも賛美をささげようとしていました。

ここで皆さん、改めて覚えていてほしいことがあります。それは、ダビデはどんな状況にあらうとも神様に対する賛美を忘れていなかったということです。今回私たちは35篇を1から見て、ダビデが大変な苦痛の中に置かれているのを見てきました。彼はいわれもないことで攻撃されたり、かつて自分が愛した親しい者たちからひどい中傷を受けることもありました。そのような状況に簡単に圧倒されて、喜びを失っていてもおかしくなかったでしょう。苦しい状況の中で恐れや不安によって自分を苦しめる者たちに対しても不満を覚えたり、やり返すことを考えたり、神様に対してもつぶやいていてもおかしくなかったでしょう。でもそんな状況の中でさえ、ダビデは自分の抱える重荷を主の前に素直に告白して、同時に主に対して変わらず感謝をささげようと心に決めていたのです。彼は置かれていた状況にかかわらず、常に主に栄光を帰すことを求めていました。

きょう私たちは三つの祈りを見てきましたが、三つの祈りの最後は、毎回賛美でした。10節をもう一度見ても、こう言うのです。「私のすべての骨は言いましょう。「【主】よ。だれか、あなたのような方があるでしょうか。悩む者を、彼よりも強い者から救い出す方。そうです。悩む者、貧しい者を、奪い取る者か

ら。」18節でも言っていました。「私は大きな会衆の中で、あなたに感謝し、強い人々の間で、あなたを賛美します。」そして28節でも「私の舌はあなたの義とあなたの誉れを日夜、口ずさむことでしょう。」と。言い換えれば、彼を取り囲む状況が、彼の主への賛美を妨げることはなかったということです。ダビデは、どんなに理不尽な自分の手に負えない状況の中にあろうとも、そのすべてを正しく取り扱われる義なる神様を見出していました。その神様の姿を忘れることはありませんでした。そしてその神様のご性質のうちに、彼は確信と喜びを見出していたのです。状況に左右されることのない、決して変わることはない神様のうちに感謝の源を見つけていたからこそ、彼はそこにあっていつも賛美をささげていました。

○結論：

そうだとするなら皆さん、私たち自身の賛美はどのようなものでしょうか？どのような状況にあろうとも変わることはない神様を見上げて、この方に心を留めて感謝をささげているのでしょうか？それとも、私たちを取り囲む環境や状況が、いつも私たちの主への賛美を妨げていないのでしょうか？確かにダビデはゆえもなく憎まれて、大きな苦しみを味わっていました。でも、その彼が最後に言っていたのです。「私の舌はあなたの義とあなたの誉れを日夜、口ずさむことでしょう。」と。あれほどの苦しみを味わっていた人物がこのように言っていたのです。皆さん、私たちも同じです。神様のうちに助けを求めて、神様にすべてをゆだねて、私たちも神様のうちにいつも賛美をささげるそのような者として歩いていくことができるのです。私たちには、そのように歩いていく責任もあるのです。もちろん、私たちの力ではできません。だからダビデが歩んでいたように、いつも神様を見上げることです。私たち自身もそんな祈りをもって、続けてともに歩いていきましょう。